

名古屋市守山区小幡  
小幡古墳発掘調査報告書

1980

名古屋市教育委員会



名古屋市守山区小幡  
小幡古墳発掘調査報告書

1980

名古屋市教育委員会

## 例　　言

1. 本誌は、名古屋市守山区大字小幡字小林2299-9番地の宅地造成地で発見された古墳の調査報告書である。
2. 本古墳の調査は、日本考古学協会員久永春男、岡故吉田富夫を学術担当者とし、七原恵史、仙田作吉、辻秀樹、後藤真、木村哲雄、松林幸大、高木信一、小出良信が実施し、愛知県立歴史商業高等学校社会科研究クラブが参加し、私立守山女子商業高等学校生徒の協力を得た。
3. 調査にあたって地主の小川一氏、文新堂文房具店、上原慶治氏、大島五郎氏と近所の方々の御協力を得た。厚くお礼申しあげる。
4. 本書の執筆は小川良信、辻秀樹、木村哲雄、仙田作吉、七原恵史が行い、全体を久永春男が校閲した。
5. 出土した遺物に登場された物質の化学分析は、武庫川女子大薬学部教授安田博幸、同時手荷園泰子、岡橋本小百合氏に担当していただいた。
6. 本書に使用した写真は、山崎二三男と七原恵史が撮影した。
7. 遺物の実測は、高木信一、小出良信、七原恵史が行い、図面のトレースと割付は兩宮方良子が行った。

## 本文目次

第1章	位置と地形	1
第2章	調査に至る経緯と調査経過	3
第3章	墳丘	7
第4章	内部構造 (I) 石室	8
	(II) 石棺	10
第5章	遺物 (I) 頸飾器	13
	(II) 武器	16
第6章	考察	17
付載第1.	名古屋市小幡古墳出土の須恵器蓋环に塗布された物質の化学分析	21
付載第2.	愛知県における石棺を有する古墳	24
付載第3.	守山区寺林古墳群と出土遺物について	27

## 挿図目次

第1図	小幡古墳位置図
第2図	小幡古墳付近地形図
第3図	小幡古墳が発見された墓地跡
第4図	打ち合わせする関係者と近所の人たち
第5図	調査のなりゆきをのぞむ人々
第6図	石室の調査状況
第7図	石室の移転作業
第8図	石棺の表面に薬液を塗布する
第9図	昭和2年当時の小幡古墳の景観
第10図	敷地内における小幡古墳位置図および墳丘推定線
第11図	小幡古墳石室実測図および主な遺物出土位置図
第12図	小幡古墳石棺配置図
第13図	小幡古墳出土須恵器実測図
第14図	小幡古墳出土須恵器実測図
第15図	小幡古墳出土漆形土器実測図
第16図	小幡古墳出土铁刀・铁鎌実測図
第17図	城山古墳出土石棺実測図
第18図	寺林古墳がある段丘
第19図	寺林古墳群付近地形図
第20図	寺林第1号墳出土仿製鏡折影図
第21図	寺林第1号墳出土石鏡実測図

## 図版目次

図版第1	(1) 石室全景(南西から)
	(2) 石室全景(北東から)
図版第2	(1) 石棺(南京から)
	(2) 石棺(北西から)
	(3) 石棺(北東から)
	(4) 石棺(寝ている人の身長は160cm)
図版第3	(1) 清掃が進み遺物が出土はじめた
	(2) 小形高杯形土器出土状態
	(3) 蓋環出土状態
	(4) 把手付器合形土器出土状態
図版第4	小幡古墳出土遺物
図版第5	(1) 寺林第1号墳出土石劍
	(2) 寺林第1号墳出土仿製鏡

## 第1章 位置と地形

小幡古墳は、瀬戸街道（主要地方道名古屋・瀬戸線）の市営バス停留所守山東中学校前から北へ約50m、名古屋市立守山東中学校南の住宅地にある。地籍は名古屋市守山区大字小幡字小林2299-9番地である。

本古墳は、かつて伊藤文四郎氏によって発掘調査され、昭和13年に「東春日井郡小幡古墳の石棺」として『愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告第六』に報告されている。その中で小幡古墳の位置を「練兵場の南、瀬戸街道との間」と記している。その後小栗鉄次郎氏は「守山町大字小幡長塚古墳」（註1）の中で「長塚古墳の後円部より南方約150mにある円墳群より、なおその西南150mの原野と耕地との境界上にある」とやや詳しく記されているが、いずれもその明確な地点が記されておらず、今日まで確認できなかった。

小幡古墳が営まれている地点は、瀬戸方面から西へ広がる丘陵の南にある標高35m



第1図 小幡古墳位置図 (1:25,000)

1. 褐塚山古墳
2. 南島古墳
3. 小幡古墳
4. 長塚古墳
5. 英白山古墳
6. 池下古墳

前後の通称小幡ヶ原と呼ばれる台地である。台地には松を中心とする雜木林が広がっていて、敗戦まで陸軍演習場として利用され、敗戦後は農地になり、今日ではすっかり住宅地になっている。

かつて台地上には大小多数の古墳があった。現存する古墳は、台地の西方から白山古墳、瓢箪山古墳、南島古墳、長塚古墳、茶臼山古墳、池下古墳である(註2)。古墳時代には、この台地は墓域とみなされてきたものであろう。

註1. 『愛知県史跡名勝天然記念物調査報告第14』 愛知県 昭和11年

註2. 伊藤敬行・田中 篤「守山市における古墳の分布 第2節古墳の分布と現状」(『守山の古墳』 守山市教育委員会 1963年)

(小出 良信)



第2図 小幡古墳付近地形図（明治22年測量）(1:50,000)

## 第2章 調査に至る経緯と調査経過

1969

昭和44年4月13日、筆者は所用があつて名古屋市立守山東中学校前にある文新堂へでかけたとき、同店東側の空地で宅地造成が行われていた。

この空地には、低いマウンドがあつて、その上やまわりには栗や松が生えていて、周囲に家が建ち並んできたのに、ここだけ開発から取り残されていた。筆者はこれまで、ここを通る度ごとに、かつて「小幡古墳」があつて『愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告』にも記載されていること、守山区の古墳に関する報告書『守山の古墳』ではこの「小幡古墳」を確認できなかつたことを想い、この小さなマウンドがあるいは「小幡古墳」ではないか、またいつかこの空地をゆっくり観察する必要があるなどと漠然と考えていた。

そうした矢先の宅地造成工事であったので、埠連文新堂店主に造成にとりかかった時期とその時の様子をたずねるとともに、近所の方々の話を聞かせていただいた。これらの方々が見聞されたことは、石で作られた防空壕状の施設があり、その中に黒い土が堆積していたということであった。それは紛れもなく横穴式石室の特徴をもつた墓構であった。私もそこそこに筆者はとつて返し、当日居合わせた後藤真、仙田作古、辻秀樹にこの行を伝え、再度現地に行き、防空壕状の施設があつたという場所を掘りさげてみた。

ブルドーザーによって整地してあるせいか地面は固くしまっていたが、その土をはねると地表下5cm程で石組みの一部とその近くで須恵器の破片を探取した。さらに1m四方を掘り抜けて平瓶の破片を発見した。こうしてこれが横穴式石室をもつた古墳であること、石室はほぼ東西方向をとることを確認したので、名古屋市教育委員会に連絡をとることにした。しかし当日は日曜日であつたため、とりあえず連絡可能な日本考古学協会員久永春男氏に電話し、事後の措置について指示を仰ぐいっぽう、地主の小川一氏にも連絡した。午後から小出良信と愛知県立緑丘商業高等学校生徒羽佐田和正も駆けつけた。近所の方や通りがかりの人も何事かと入れかわり立ちかわり見学にきた。そういううちにこの土地の管理者と称する不動産業者が来て、われわれに抗議した。折しも地主との連絡がとれ、工事延期について了解を得た。夕刻、上



第3図 小型古墳が発見された整地跡



第4図 打ち合わせをする関係者と近所の入たち



第5図 調査のなりゆきをのぞみこむ人たち

た。ついで敷地と石室の位置を平板測量した。

中部日本新聞に小型古墳が紹介されたので、見学者が次第に増えた。見学者の中には、古墳が消滅することを惜しむ声が多数あり、調査にあたったわれわれの懸念になつた。午後から私立守山女子商業高等学校生徒が参加した。

4月16日（水曜日） 雨のため作業ができない。木村が現場を巡視した。

原慶治氏が訪れ、事情を察し保護柵を作るようと杭を提供された。立ち入り禁止の札をつけ、関係機関の処置を待つことにした。

4月14日（月曜日） 名古屋市教育委員会社会教育課から係長斎藤孝氏、横井在時氏、名古屋市文化財調査委員吉田富夫氏、愛知県教育委員会社会教育課文化係柴垣勇夫氏、日本考古学協会員久永春男氏が相次いで現地に到着し、直ちに対策を協議した。その結果工事を延期し、緊急に調査を行うことになった。早速調査を開始し、夕刻までに石室と石棺の全体をほぼ明らかにした。石室は最下段の石組みが遺存した。石棺は底石が残るだけであった。

4月15日（火曜日） 石室の北側で道路に面した部分の整地作業が進められるので、この作業区域にかかる墳丘の残土を調査した。この残土は墳丘の一部であることは確かであるが、積成状態は明確にできなかつ

4月17日（木曜日） 午前中雨、午後から晴れてきたが、石室には水が溜り、作業は中止した。

4月18日（金曜日） 午後3時から仙田の指揮で縁丘商業高等学校社会科研究クラブ員が石室の清掃作業を行う。奥壁に接して蓋壺が出土した。

4月19日（土曜日） 石棺の底部周辺を掘りさげた。石棺は石室床面上に直接置いてあり、敷石は石棺の底石よりやや高く敷いてある様子が明らかになった。奥壁から4mの地点に間仕切石が、7mの地点に閑塞石の残りが発見された。

4月26日（土曜日） 午後から石室実測の準備を行う。

4月27日（日曜日） 石室の実測図作成が終了した。

4月29日（火曜日） 石室の実測図作成が完了し、写真撮影も完了した。前底部を断ち割るとなお遺物が出土するので、中心線より北側をまことにさげ、奈良朝様式の須恵器を探集した。

6月7日（土曜日） 石棺を保存するためとりはずし作業を行う。石材が軟らかいのでその取り扱いに苦労した。

6月8日（日曜日） 石室の移転作業を行う。市教育委員会社会教育課係長斎藤孝はじめ総勢10名である。まず石に番号をつけ、順次とりはずしにかかった。石室の最



第6図 石室の調査状況



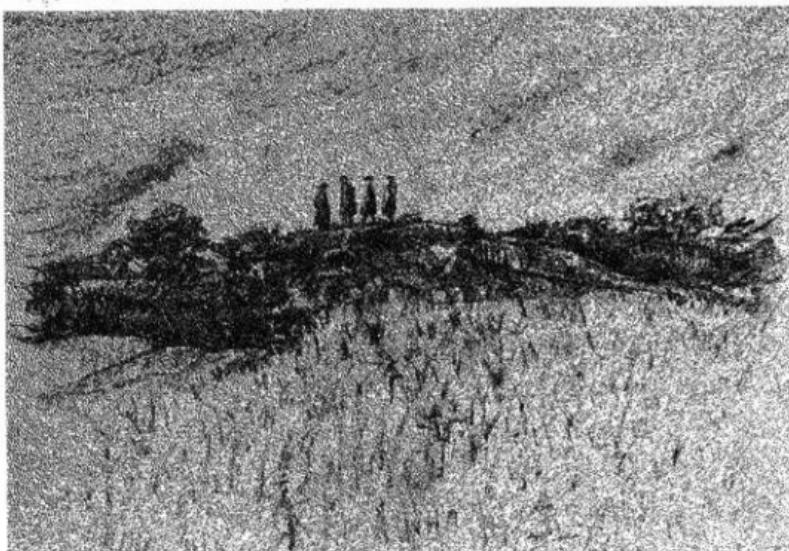
第7図 石室の移転作業



第8図 石棺の表面に薬液を塗布する

下段の石ばかりであるが、どれも深く埋めこまれているので、石を運びだせるようにするまでがひと仕事であった。石の重さも見かけより重く、移動には予想以上の時間がかかった。午後3時すぎ、守山東中学校の校庭に運びこんで作業を終了した。古墳の北側には新しく建てられた家が完成間近になっていた。

(七原 恵史)



え・木村 一良

第9図 昭和2年当時の小幡古墳の景観（『愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告第6』による）

### 第3章 墳丘

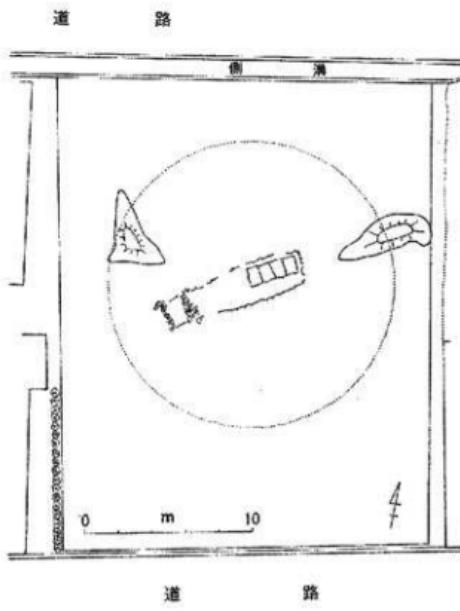
小幡古墳の墳丘は大半がすでに破壊されており、墳丘の北側部分がわずかに残存していたが、整地作業によってさらに削られ、調査を開始したときには石室の東側と北西側に高さ70cm～80cm程度の墳丘の残土が遺存していたにすぎなかった。

昭和3年に刊行された『愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告第六』の「小幡の石棺」の項で伊藤文四郎氏は「円墳で直径9間余、高さ10尺」と記録されている。この数値は、メートル法に換算すれば、直径16m余であり、高さは3.3mになる。この直径の円は、現存する石室を内包し、墳丘の条件をかなえ、記録が正しかったことが裏づけられる。墳丘の高さも、石室の高さ2m、天井石の厚さ50cm、それを復元封土の厚さ50cmを加味すれば、3mになり、やはり正しい記録であろう。

墳丘の範囲を、この数値をもとに復原すると、封土の名残りであると考えられた土があった地点に及び、残土は墳丘の末端であったと考えてさしつかえなかろう。

墳丘は敷地内におさまっており、分筆の際にも一筆として扱われていたのではないかと推測される。

(木村 哲雄)



第10図 敷地内における小幡古墳位置図および墳丘推定線

## 第4章 内部構造

### (I) 石室

小幡古墳の内部構造は、主軸を北東～南西にとり南西へ開口した横穴式石室である。石室はすでに封土とともに被っていた。調査直前の整地作業の際には、それでも石室床面から高さおよそ50cmまで石組みが遺存していたということであったが、ブルドーザーでさらにこれを取り壊したため、石室最下段の石列が残されているだけであった。

石室は全長8.5m、玄室はやや崩壊している。玄室の長さは7mで、羨道との境に扁平な河原石を置いて間仕切りしている。玄室の幅は、奥壁で1.7m、中央で2.25m、間仕切石のある地点で1.75mである。

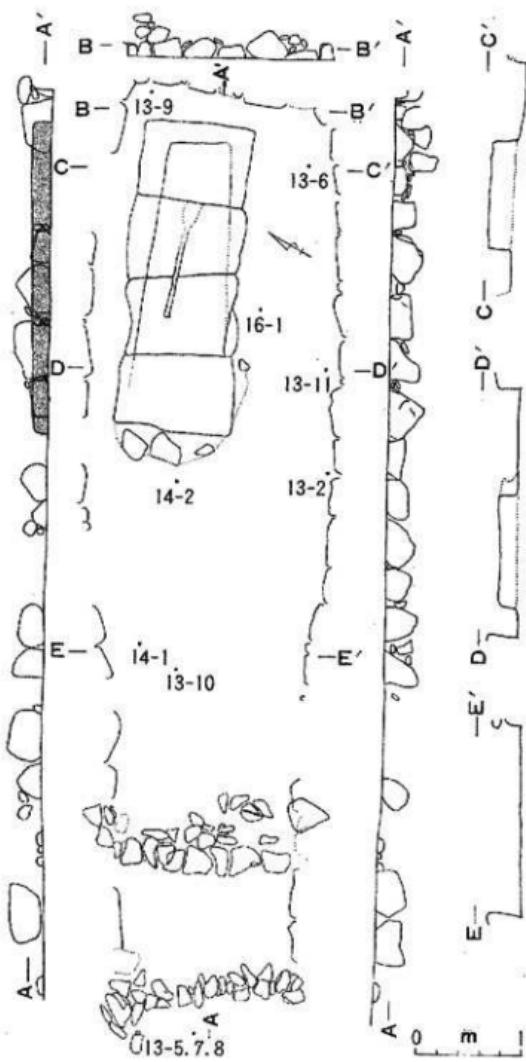
間仕切石の前端から1.5m離れたところにも河原石が並べられている。この河原石が閉塞石で、河原石と河原石の間が羨道である。間仕切石も河原石とともにかつてはもう少し高く積まれていたと考えられる。

前庭部は攪乱されていたが、前方へゆるやかに傾斜している状態が確認された。

石室の奥壁や側壁には、重さおよそ70kgから100kg程度のチャートの自然石を用いている。石室の構築に使われたこれらの石は、本古墳が存する小幡ヶ原や北の丘陵地帯あるいは、庄内川沿岸では採集できない。それは庄内川の上流である玉野川に求めたであろう。

石室は、ほぼ平坦なこの台地のうち最高地を選び(註1)、削平し、当初に予定されたプランに従って地山を掘りくぼめて基底部の石を据えている。奥壁には大きな石を用いることなく、側壁と同程度の石を使っている。

石棺は地山の上に直接置き、石棺と側壁の間に、石棺の底石の厚さ15cmに合わせて礫を敷きつめていたと推定できる状態が、南側側壁に遺存していた。石棺に用いた石材が軟かいので、こうした括置をとったものと理解される。玄室の前端には敷石は遺存しなかったけれど、先の調査の折あるいはその前後に取り払われたものと思われる。羨道の敷石は残っていなかった。



第11図 小幡古墳石室実測図および主な遺物出土位置図  
(数字は捕獲番号を示す)

石室に関する伊藤文四郎氏の観察では、「棺の北側は3尺を隔てて東西に約16尺の間大岩塊にて組み立て其の下部には小岩塊を埋め込んで地盤の安定が計つてある。……西・東・南の三方には石櫛の組石がないが、恐らく或る時代に南側から発掘して石櫛をこぼち、石棺を発いたものであろう。然して組石は全部運び去ったものと思われる。」と記されており、われわれが調査して得た結果とはほぼ一致している。伊藤氏の調査が行われた時点ですでに石室は「西・南・東の三方」の様は抜き取られていたのである。床面の敷石は「小岩塊」として表現されている。ただ、北側側壁の長さが報文中では16尺とし、石室平面図に併記されている長さは17尺になっていて喰い違いがあるが後者の数値17尺は5.15mで、これが実際の数値であろう。この5.15mという数値は、間仕切石までなお1.35m不足する。この不足する部分には側壁が欠落しているので、石組みが存するところまでを石室としてとらえたために生じた誤りであったと考えられる(註2)。

註1. 『愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告第六』に掲載されている古墳の遠景写真をみると、

小幡古墳が微高地に占地されている様子がよくわかる。

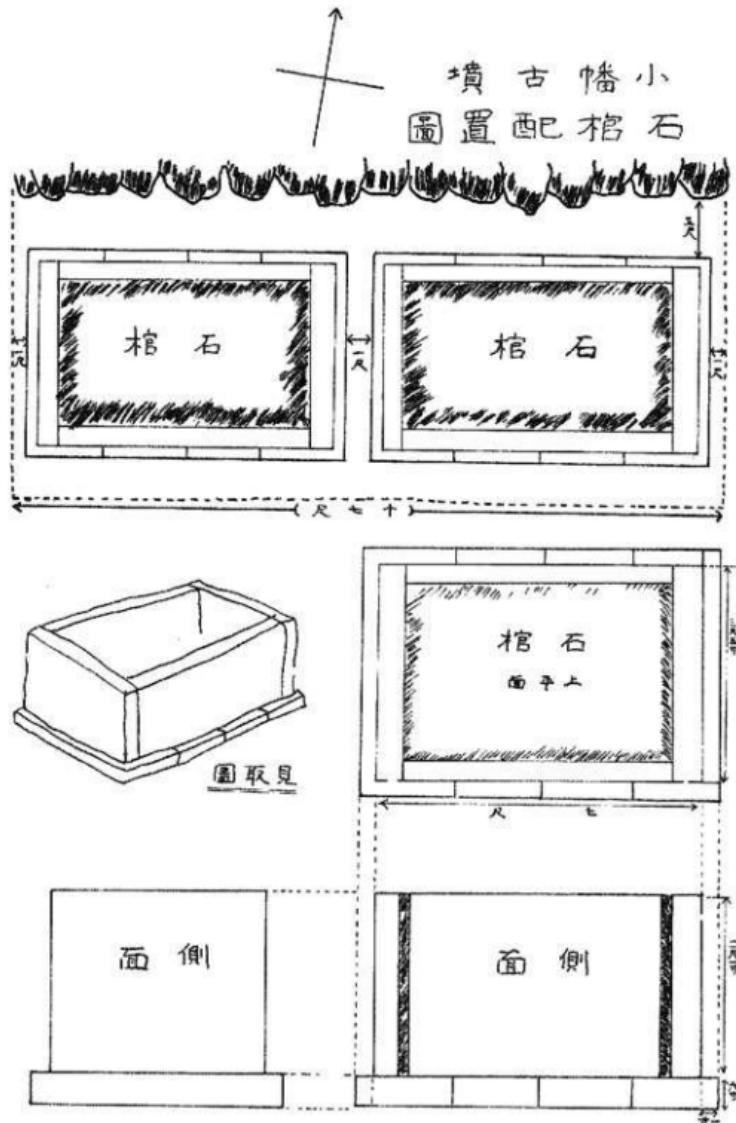
註2. 伊藤文四郎氏はもっぱら石棺に重点をおいて調査しており、石室や墳丘の調査は十分行われていない點はあるが、随所に数値が記入しており、細かい観察がなされていて、本古墳が小幡古墳であることの確証を得たことはなにも代え難い。改めて敬意を表するものである。

(辻 秀樹・七原 恵史)

## (II) 石 棺

昭和3年の調査報告では「墳壇の中央には東西に長く同形の棺二箇並列し前後二つの棺の間隔が一尺ある」とあり、別図にその状況が示されている。今回の調査で確認された石棺はこのうち奥壁寄りに置かれていたものである。

組合式石棺であるが、石棺の底石だけが遺存していた。底石は4個の台形の石を連接させ、全体として長方形になっている。長さ2.95m、幅1.05m、厚さ22cmである。この底石の上に4枚の側石を箱式に組み合わせたもので、奥端から3つめの底石



第12図 小幡古墳石棺配置図（『愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告第六』より板写）

には側石をはめこむための浅い段が認められた。底石の中央には漏斗状のくぼみがあるが、排水のために掘りこまれたとしても溝はあまりにも浅く、また外部へ開口しておらずその用をなさない。偶然にできたものかもしれない。石棺の側石は亡失しており、蓋石は早くから失われていたようである。

石棺の寸法を先の調査と比較すると次表のようになる。

石棺計測値一覧表

△	底 石			側 面(短辺)			側 面(長辺)		
	幅	長さ	厚さ	幅	高さ	縦高	外法	高さ	縦高
伊 藤	3尺7寸 1.132m	7尺2寸 2.97m	6寸 0.198m	3尺5寸	2尺1寸	2尺7寸	7尺	2尺1寸	2尺7寸
今 四	1.05m	2.95m	0.220m	—	—	—	—	—	—
誤 算	0.082m	0.02m	0.022m	—	—	—	—	—	—

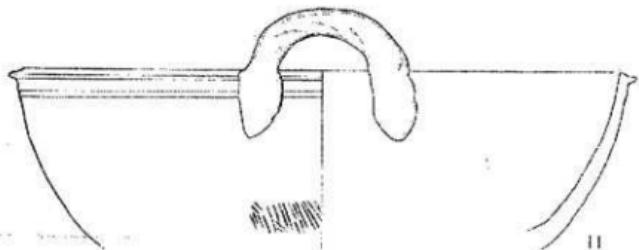
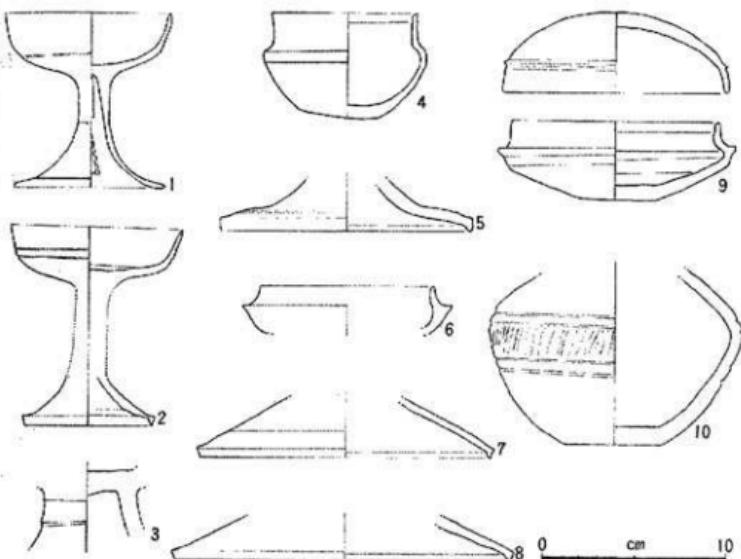
石棺の素材について先の報告書では粘板岩であるとし、「前方は稍白色を帶び、後部のものは青色を帶んでいる」と報告している。今回石棺の素材について検討したところ、泥岩あるいはシルト岩と称すべきものであり、瀬戸層群の矢田川累層に存するものであることがわかった(註)。この泥岩(シルト岩)は軟かく、切り出しや加工はきわめて容易であるが、その運搬と組み立て作業は困難を伴ったものと思われる。

註 愛知県立昭和高等学校教諭 近藤洋氏の御教示による。

(七原 恵史)

## 第5章 遺物

小幡古墳に副葬された遺物は、須恵器の高杯5、蓋杯3、扁平広口壺1、長頸壺1、把手付器台形土器1、大形壺1、甕1、鉄刀および鍔鐵である。この他にも上層の破片が若干出土しているが器形を明らかにしうるものはない。土器の出土地点は第11図のとおりである。



第13図 小幡古墳出土須恵器実測図

## (1) 須恵器

**無蓋高坏（第13図の1～3・5）** 1は口径9cm、器高9.4cm、脚端の径8.2cmをはかる。杯の下部と脚の中央および脚端にそれぞれ沈線がめぐらされており、脚には中央の沈線をはさんで上下に透かしがある。下段の透かしは細長い三角形を呈し、上段は細く桿状になって形式化している。焼成は良好である。

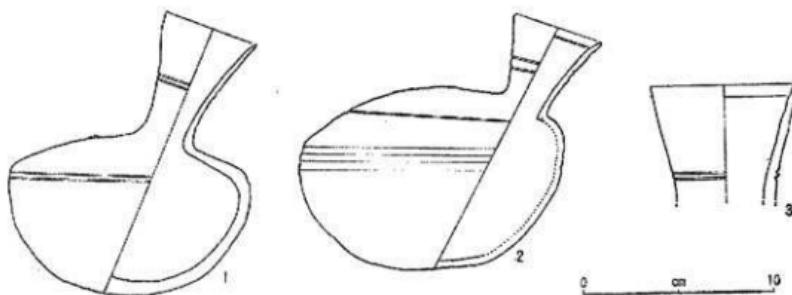
2は口径9.0cm～9.2cm、脚の中央部が欠失しているが高さ9cm程度と推定される。坏に2条の沈線をめぐらさせている。脚端は屈折させて面をつくる。紫褐色を呈し、固く焼きしまっている。

3は杯と脚の接合部である。接合部の直径は5cmである。坏と脚を接合する際に削土を貼りつけているが、ていねいに仕上げてないので粘土帶の下方は段がついている。焼成は良好である。

5は高坏の脚端の残欠である。脚端の直径は推定13.6cmをはかる。脚の裾が下方で急に開き、端部は折り曲げて面を作る。第5型式に比定できる。

**有蓋高坏（第13図の6）** 有蓋高坏の杯上部の破片である。口径推定9cmで小形である。身の立ち上がりは内傾している。黒色を呈し、焼成は良好である。

**蓋坏（第13図の7・8・9）** 7と8はともに笠形の蓋で、口縁端を内側に屈折させている。第5型式に比定される。7の口縁部は須恵質に焼きあがっているが、頂部は焼成が十分でなく赤褐色を呈している。頂部は両者とも欠損している。



第14図 小幡古墳出土須恵器実測図

9は身と蓋がセットになっている。奥塗左隅で発見されたもので、原位置を保っている唯一の土器である。蓋は口径12.2cm、器高4.8cm、頂部は半球形を呈し、頂部から口縁部にいたる境に突起をめぐらしている。身の口径は11.1cm～11.2cm、器高4.4cmである。底部は鉢で盤形し、「人」字を2つ並べたようにみえる刻印がある。身も蓋も紫褐色に焼成してある。

身と蓋の内面に黄白色の物質が塗布されていた。分析の結果白土であることが判明した（付載第1参照）。

**長頸壺**（第13図の10） 口縁部が欠失している。肩部と下腹部に2条1組の沈線がめぐらされ、2組の沈線の間に刺突文が彫されている。

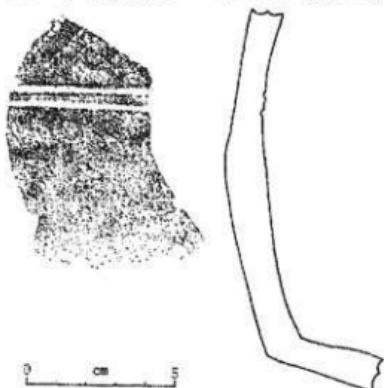
**把手付器台形土器**（第13図の11） 口径推定34cm、半球形の大きい杯部に直径約2cmの棒状粘土を折り丸めて把手をしている。杯部は器台のように見える。破片であるため脚の有無はわからない。杯部は下方に叩き目が施されている。

**平瓶**（第14図の1～3） 1は口径4.9cm、器高13.2cm、最大腹径13.9cm、口頸部に2条、口頸部から肩部に至る間に1条、肩部に3条の沈線がめぐらされている。底は丸底に近い。

2は1よりやや大きく、口径5.1cm、器高15cm、腹径12.6cmである。口頸部に2条、肩部に帶状の沈線をめぐらしている。1よりやや肩部が張る底は丸底である。肩部に形式化した実芯がつけられている。

3は平瓶の口頸部の破片である。口径推定7.5cm、2条の沈線をめぐらしている。1と2よりやや大形である。

**壺形土器**（第15図） 脊部から口頸部にかかる部分の破片である。頸部には1条の沈線があり、その上に斜位の列点文が配されている。器体の厚さが0.8cm程あり、厚手で大形の壺になろう。



第15図 小幡古墳出土壺形土器拓影図

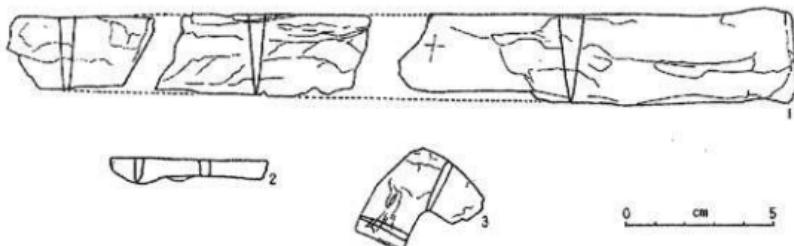
## (II) 鉄 製 品

鉄刀（第16図の1） もとは一本であったものが3つに折れている。柄に近いところで身幅3cm、峯幅0.8cmをはかる。

鉄鎌（第16図の2） 鉄鎌の茎である。現存する茎の長さは5.2cmである。

鉄製付属品（第16図の3） 幅1.8cm、厚さ3cm前後、現存する部分は鎌形をしている。刀子の近くから出土しているので、吊金具かと思われる。

（仙田 作吉）



第16図 小幡古墳出土鉄刀・鉄鎌実測図

## 第6章 考察

小幡古墳は、大正15年10月に調査されてから久しく人々から忘れられていた。その後行われた調査でも、古墳の所在地を確定できなかった。今回、はからずも再発見し、まほろしの古墳を確認したものである。

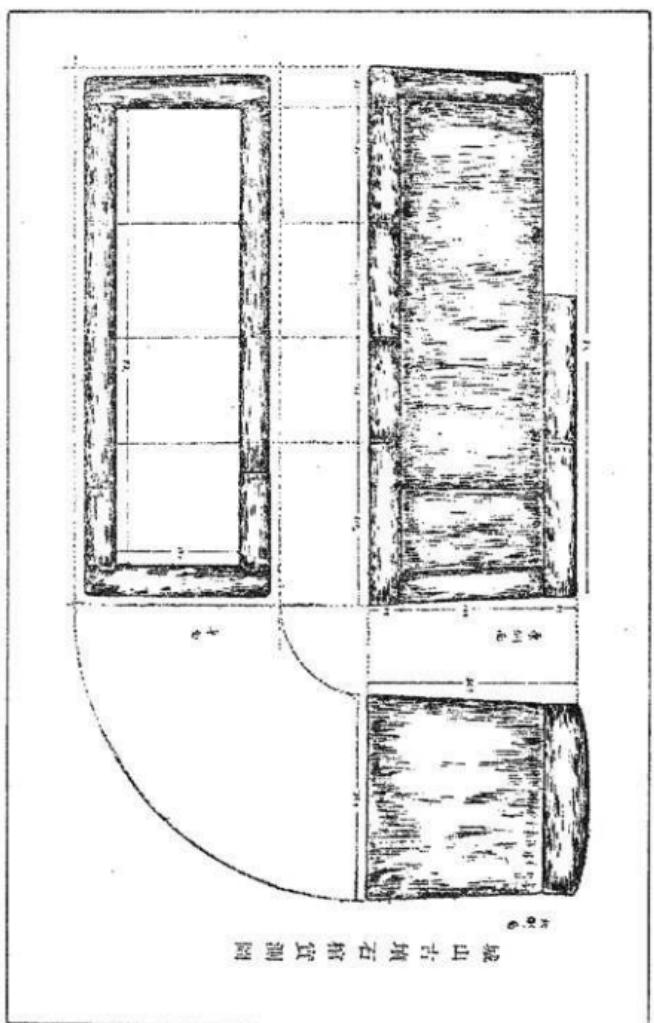
小幡古墳を再発見したとき、墳丘は殆どなくなっていた。大正15年の調査によれば、墳丘は「直径9間余、高さ約10尺」であったという。メートル法に換算すれば直径16m余、高さ約3mである。石室の全長8.5mにみあう数値である。

石室の法量は、全長8.5m、玄室の長さ7.0m、幅は奥壁で1.75m、中央部で2.25m前端で1.75m、羨道の長さ1.5mで、25cmの倍数になり、宋尺を用いている。

本古墳がもつ特色は、内部埋葬施設として石棺を用いていることである。石棺はかつて2個存したが、調査の時点では奥壁寄りの1個で、しかも底石だけであった。石棺の底石は、4枚の石を連接し全体として長方形にしている。石の切断面は平滑に仕上げられていて、ふたつの石を組み合わせると寸分の隙も生じない。石棺は、長持形に側石を組み合っていたが、側石も4枚の石を連接させて構成していた。蓋石は早くから亡失したためその形態はわからないが、千種区田代町城山古墳と同様かまほこ形であったと推定される。

石棺に用いられた石材は、「愛知県史跡名勝天然記念物調査報告第六」では粘板岩として報告されているが、今日では泥岩（シルト岩）として理解されている。泥岩は、石化の途中にある岩石で、その材質は極めて軟かい。素材が加工しやすいという性質を利用して小幡古墳の石棺は作成されているが、その技術には目をみはらせるものがある。

泥岩は、切り出しが容易であること、加工が容易であることなどの利点をもつが、これを運搬することと、それを組み合わせることについては細心の注意を要したものと思われる。そこには専門的な岩石に対する知識と熟練した腕をもった工人たちの集団がいたことを暗示している。古墳時代において石棺の作成に従事したのは石作連であった。その工人たちの居住地が『和名抄』にいう石作郷で、中島郡と山田郡にあった山田郡の石作郷は、現在の愛知県長久手町岩作であるとされている（註1）。小幡古



城山古墳石燈籠圖

第17図 城山古墳石燈籠測図（『愛知県史跡名勝天然記念物調査報告第7』より転写）

墳の石棺を作成したのはこの工人たちではなかつたろうか。

いっぽう泥岩は、矢田川流域に広く分布する瀬戸層群中の矢田川累層にある。この泥岩を地表から掘り出すとすれば莫大な労力を要するが、露頭している地点があればそこから切り出すことができる。こうした場所を求めるにすれば、小幡古墳から東へ、直線距離にしておよそ5km、尾張旭市長坂町がある。長坂町は、東西に長い標高70mの丘陵地であるが、この丘陵北側斜面東から流れてくる矢田川がぶつかり、ゆるやかに流路を変えている。ここの丘陵崖面に泥岩が露頭している(註2)。ここから石材を切り出したとすれば、矢田川を使って運搬することもでき、徒歩でも小幡古墳まで約10kmであり、距離的にもさして遠くない。小幡古墳の石棺に用いられた泥岩とこの地点に産する泥岩の組成は酷似しており、あわせて愛知郡長久手町岩作とこの地点の距離が約2.5kmであることは、採石地として有力な候補地である。

次に注意されるのは、石室から出土した蓋壺内面に塗布された白色の顔料である。その化学的分析は武庫川女子大学薬学部教授・安田博之氏によって行われ、顔料が白土であることが明らかになった(付載第1参照)。白土は蓋壺の蓋と身の内面にていねいに塗布されており、薄い膜面をつくっている。土器の内面に白土を塗布した例がないので、その意図するところを推しありかねるが、白という色がもつ「消淨」を示したのではないかと推考してみた。

また、本古墳で注意されるのは、供獻されていた土師質の須恵器である。前述の蓋壺と小形の無蓋高壺がそれである。両者とも紫褐色を呈し、器面は光沢を帯びていて、いわゆる生焼けではない。このような焼き上がりを当初から目的として作成されたものである。その技術的な問題と分布範囲は、小幡古墳が築造された頃の時代を解明するひとつの手がかりになるものと思われる。今後の課題としたい。

小幡古墳に供獻された高壺、蓋壺、平版などはいずれも尾張・三河地方古墳出土須恵器の幅半上第3型式に属するもので、6世紀代に築かれたものであろう。小幡古墳にはその後も追葬が行われた形跡がある。前庭部から出土した高壺と蓋壺はその時に供獻されたものであろう。

小幡古墳の墳丘や石室の規模は、この地域における後期古墳に一般的にみられる。しかしながら他の古墳と異なるのは、内部埋葬施設として石棺を用いていることであ

る。小幡古墳の被葬者は、この石棺製作を担当した石作連と直接関係をもった家父長  
屋の一員であろう。いまひとつ注意されるのは、名古屋市千種区田代町城山にあった  
古墳から、本古墳と同じ技法を用いた石棺が出土している(註3)ことである。実物を  
直接比較する術はないが、報告による限り、同一の工人集団によって製作されたもの  
と推測される。この仮定が正しければ、小幡古墳の被葬者と田代町城山古墳の被葬者  
は親縁な関係にあったものであろう。

註1. 久永春男「遺跡遺物の取り扱い方」(『日本歴史講座 第8巻 歴史教育編』河出書房  
昭和27年)

註2. 昭和46年、当時愛知県立長久手高校生であった田之尻毅君が現地を案内してくれた。記  
して謝意を表するものである。

註3. 「田代町城山の古墳」(『愛知県史跡名勝天然紀念物調査報告第七』 愛知県 昭和4年)

(七原 恵史)

## 付載第1 名古屋市小幡古墳出土の須恵器蓋坏に 塗布された物質の化学分析

武庫川女子人学栄学部

安田博幸・青園泰子・橋本小百合

須恵器蓋坏は古墳からもっとも豊富に出土する遺物の一つであるが、その内面に塗布物をとどめる例ははなはだ少ない。名古屋市小幡古墳から出土した須恵器蓋坏のうちの一組には、その身の内面に当初塗布された白色の顔料が雖然と残っていて、稀な例として興味深い。

このたび、その顔料物質の鑑定を依頼され材質判定のためのいくつかの化学分析を実施したので報告する。

### 試料の外観と分析用試料の採取

試料は、須恵器の蓋坏の身の内面全面に塗布されて、今なお薄い層状をなして付着して残っている淡黄褐色の物質で、身の底の部分のものはすでに剥落している。塗布物質は当初白色であったと思われるが、埋蔵中に土壤鉄成分による着色をうけて、淡黄褐色を呈するようになっている。

その底部の剥落箇所に接して残っている試料薄層から、鋼針をもって注意深く薄片を剝離して約30mgを採取し、分析用試料とした。

### 実験の部

このたびの試料の構成物質としては、漆喰（炭酸カルシウム、 $\text{CaCO}_3$ ）とその変成物（硫酸カルシウム、 $\text{CaSO}_4$  やリン酸カルシウム、 $\text{Ca}_2(\text{PO}_4)_3$ ）、または白土（主成分：ケイ酸塩類）が考えられる。

それで、それらの確認反応とされる下記の各反応による微量化学分析を行った。

#### カルシウムの検出試験：

漆喰やその変成物のカルシウムは酸で溶けてカルシウムイオン ( $\text{Ca}^{2+}$ ) となる。この  $\text{Ca}^{2+}$  は、シウ酸アンモニウム試液を加えてシウ酸カルシウムの難溶性結晶に導びくことによって確認できる。

試料粉末の一部(5mg)を6規定塩酸で処理し、不溶成分から分離した液をアンモニア水で中和し、シュウ酸アンモニウム試液を加えたが、シュウ酸カルシウムの白色沈殿の生成は認められなかつたので、試料中にカルシウムイオンを生成しやすい成分は存在しない、と判断する。

#### 炭酸塩( $\text{CO}_3^{2-}$ )の検出試験：

試料粉末5mgを小型ガス捕集器(註1)にとり、30%酢酸を添加したが炭酸ガス( $\text{CO}_2$ )の泡の発生を見ず。 $\text{CO}_2$ の発生を確認するために水酸化バリウム試液との接触による炭酸バリウムの生成試験でも白濁を認めず(陰性)。したがって炭酸塩は存在しないことがわかる。

#### 硫酸塩( $\text{SO}_4^{2-}$ )の検出試験：

試料粉末5mgに希塩酸を加えて加熱し、かきませたのち、不溶成分を遠心分離器にかけて除き上澄液を加熱して蒸発乾固させる。残留物質を一端を封じた小ガラス管内で金属ナトリウムの小片と赤熱熔融し、冷後塩酸を加えて管口に硝酸鉛紙をかざしたが、硫化水素( $\text{H}_2\text{S}$ )の発生による黒変が認められなかつたので、硫酸塩は存在しないと判断する。

#### リン酸塩( $\text{PO}_4^{3-}$ )の検出試験：

試料粉末5mgに希塩酸を加えてかきませたのち、不溶成分を遠心分離し、上澄液にモリブデン酸アンモニウム試液を加えて加温したが、リンモリブデン酸アンモニウムの形成による黄色沈殿の生成は認められなかつた。従つて、リン酸塩は試料中に存在しない。

#### ケイ酸塩( $\text{SiO}_3^{2-}$ , $\text{SiO}_4^{4-}$ )の検出試験：

試料粉末5mgに少量の濃硫酸を加え、加熱したのちアンモニア水で中性とし、メチレンブルー試液2滴を加えてかきませたのち、遠心分離を行うと、沈殿は青色となつた(反応陽性)。

したがつて試料はケイ酸塩である。

### 判 定

以上の実験結果の示すところから、小幡古墳出土の須恵器蓋坏の身の内面に繪有さ

れて残存していた白色物質は、漆喰やそれから変成される物質ではなく、主成分がケイ酸塩類であるところの白土質であると判定する。

(1977. 7. 10 分析)

註1. 石鶴守三：『微量元素分析』p. 136 (南山堂) 1966.

## 付載第2 愛知県における石棺を有する古墳

今回、小幡古墳の調査で、内部埋葬施設としての石棺に接する機会を得た。これを契機に、愛知県において石棺を有する古墳を観見してみた。石棺を有する古墳の地名表は別表のとおりである(註1)。

石棺を有する古墳は、今日までに確認されているのは27基である(註2)。これを地域別にみた場合、濃尾平野では14基あって、愛知県内における石棺を有する古墳の半数を占める。知多半島では古墳の総数も少なく、東海市の1基を数えるのみであるけれど、三河湾に浮かぶ日間賀島に2基があって注意される。西三河地区では、岡崎市2基、幡豆郡に4基を数えるが、幡豆郡の2基は、同郡佐久島にあって、日間賀島の2基とあわせて考えると、離島における数が多く、古墳時代における両島の政治的、経済的位置を示唆しているもの如くである。東三河地区では渥美郡田原町に4基が集中しており、豊橋市や豊川市には石棺が作られていない。

濃尾平野における石棺は、犬山市と一宮市に家形石棺が集中している(註3)。この地域的特色については、かつて久永春男氏が尾張氏の一族である石作連が支配する石作工人集団の存在を指摘されている(註4)。このたび調査した名古屋市守山区小幡古墳と名古屋市千種区城山古墳の石棺の素材と技法がきわめてよく似ており、同一工人集団によって作られた可能性が大きい。

石棺に用いられた素材の共通性という点からは、濃尾平野北部における凝灰岩、濃尾平野東部における泥岩(シルト岩)、渥美郡田原町におけるラジオリア(註5)は、いずれも古墳の近くで得られる石材を用いている。

これらの石棺を有する古墳が营造された時期は、須恵器の編年上第3型式から第4型式にかけてであるが、瀬戸市穴田第10号墳のように8世紀初頭に比定されるように後出の例もある(註6)。

石棺の形態からは、家形石棺と組合式石棺の二形態に限られるようであり、家形石棺も単純な形態をとり、組合式石棺では石室内に直接つくりつける形態が多く、近畿地方にみられるような多様性は認められない。

以上、石棺を有する古墳についてみてきたのであるが、細部については今後の課題

古 墳 名	所 在 地	墳 形	石 棚
上野第1号墳(船塚)	大山市上野町字郡	円 墳	家形石棺
高槻古墳(羽黒古墳)	タ 羽黒	タ	タ
富萬古墳(永洞古墳)	タ 富萬	タ	タ
鶴野第1号墳	タ 鶴野	タ	タ
鶴野第2号墳	タ 鶴野	タ	タ
浅井第14号墳(巣塚)	一宮市浅井町尾賀	タ	タ
浅井第18号墳(人面塚)	タ 河田	タ	タ
浅井第21号墳(豪宕塚)	タ 黒岩	タ	タ
坊主山古墳	春日井市大泉寺町	タ	組合式石棺
御綱山古墳	タ 熊野町名東	タ	タ
小幡古墳	名古屋市守山区小幡小林	タ	〃
川東山7号墳	タ 守山区大字川字東山	不 明	不 明
城山古墳	タ 千種区田代町城山	円 墳	組合式石棺
穴田第10号墳	瀬戸市穴田町	タ	家形石棺
駿逸御堂古墳	東海市父町駿逸御堂	〃	組合式石棺
北地第6号墳	知多郡南知多町日間賀北地	〃	タ
北地第8号墳	〃	〃	タ
庵地古墳	岡崎市細川町庵地	〃	タ
森東古墳	タ 森町森東	〃	タ
とうてやま古墳	幡豆郡東幡豆町山崎	タ	タ
西川原古墳	タ 吉良町西川原	〃	タ
山の神塚古墳	タ 佐久島字白浜	タ	タ
平古第3号墳	タ 幸平古	タ	タ
醤池古墳	渥美郡田原町醤池	タ	タ
神明社古墳	タ 北番場	タ	タ
柳沢古墳	タ 柳沢	タ	タ
新焚古墳	タ 西神ノ	タ	タ

としたい。なお、本稿を作成するにあたって、大下武、小野田勝一、木下克己、齊藤嘉彦、芳賀陽、牧野彦一、宮川芳照各氏の御教示を得た。記して謝意を表する。

註1. 地名表を作成するにあたって使用した文献は次のとおりである。

- (A) 『愛知県遺跡分布図』 愛知県教育委員会 昭和47年
- (B) 『愛知県史跡名勝天然記念物調査報告』 愛知県
- (C) 高木志樹・宮川芳照・杉崎章『上野古墳群、愛知県犬山市埋蔵文化財調査報告』犬山市教育委員会 1968年
- (D) 『一宮市史 資料編三』 一宮市 昭和38年
- (E) 『春日井市誌』 春日井市 昭和38年
- (F) 久永春男・田中稔・伊藤敬行『守山の古墳』 守山市教育委員会 1963年
- (G) 久永春男・田中稔・伊藤敬行他『守山の古墳 調査報告第一』 名古屋市教育委員会 1966年
- (H) 宮石宗弘・山川一郎・杉崎章・柴田謙三『穴田古墳群 第2集』 愛知県企画局・瀬戸市教育委員会 1973年
- (I) 『豊田市の遺跡』 豊田市教育委員会 昭和48年
- (J) 齊藤嘉彦・山口義『慈地古墳・鳥ヶ根古墳』 関崎市教育委員会 1976年
- (K) 吉田章一郎『佐久島の古墳 一色町誌資料第1輯』 蟻豆郡一色町 昭和42年
- (L) 『田原町史』 渥美郡田原町教育委員会 昭和46年

註2. 春日井市神領にある高御堂古墳の後円部に石棺が存するという伝聞があるけれど、石室の誤認であるおそれがあるので除外している。また名古屋市北区福町味綱蔵園に刎込式石棺の棺身があるけれど出土した古墳が不明であるため除外してある。名古屋市守山区川東からも石棺が出土したことが『東春日井郡誌』に記録されており、出土した古墳の位置も確認できたのでつけ加えた。

註3. 註1.の文献 (C) による。

註4. 久永春男「遺跡遺物の取り扱い方」(『日本歴史講座 第8巻 歴史教育編』 河出書房 昭和27年)

註5. 渥美郡田原町の渥美湾(三河湾)側に産出地があったが、現在はなくなっているということである。

註6. 註1.の文献 (H) による。

(七原 恵史)

### 付載第3 守山区寺林古墳群と出土遺物について

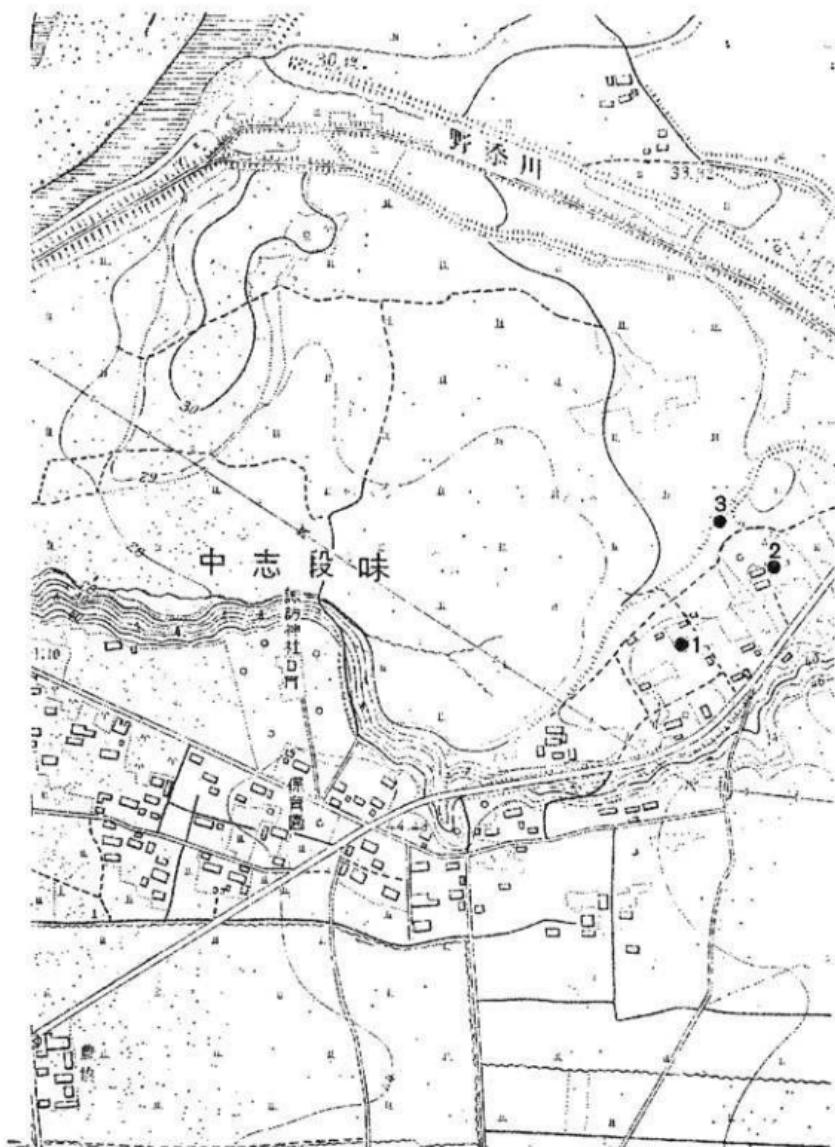
去る昭和45年8月に、名古屋市教育委員会から、守山区大字中志段味字油石で近く宅地造成が行われることになって、この宅地造成予定地に地目が「塚」になっているところがあるから、事前に調査を行うよう依頼された。

宅地造成予定地は中志段味の北東部で、付近の地形は、標高45mの中志段味の段丘が、S字状に彎曲し、彎曲部に標高36mの低い段丘がテラス状を呈している。段丘は、北東側は、庄内川の支流である野添川に開析され、段丘の北西側は庄内川の氾濫原で、現在標高28~29mの水田である。

地目「塚」は、下位の段丘と水田との境にあって、水田面より60cm高く、畦畔に囲まれた平面形は三角形であった。「塚」上には砂利や甃が堆積し、これに混って中世陶器の破片が入っており、古墳とはかけ離れたものであることがわかった(註)。しかし、「塚」という地目が残っているのは、この地点ではなく、近くに本当の古墳があるのでないかと考えた小出良信と筆者は、「塚」の東方約50mの地点にある竹藪を歩いて、ここに直径約7m、高さ約1mの古墳らしい盛り土を見つめた。そこでさらに、この土地に詳しい人はいないかと探しにかかり、最初にお会いしたのが川本軍二郎氏(当時82歳)であった。氏は、むかし、家を増築するために、自宅の裏にあった小丘を壊した。このとき小丘の裾から甃が出土し、この中から遺物が出土したので、保管されているということであったので早速拝見させていただいたのが石剣1個と彷彿重圓文鏡1面であった。これによって、この段丘上に古墳が築かれていたことが明らかになった。

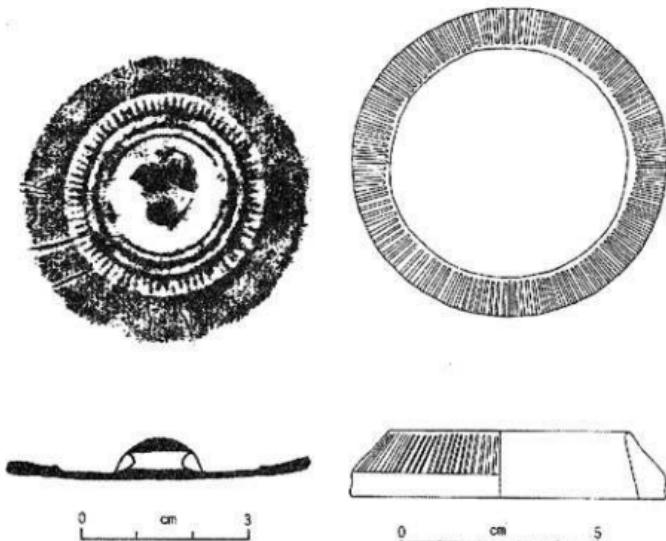


第18図 寺林古墳がある段丘



第19図 寺林古墳群付近地形図 (1:30,000)  
 1. 寺林第1号墳 2. 寺林第2号墳 3. 地目「冢」

これまで、この段丘上に古墳が築かれていようとは考へてもみなかつただけに、新たな発見を喜ぶとともに、改めて古墳の立地について検討しなければならないと痛感した。当日はとりあえず遺物の写真を撮影をさせていただいて辞退した。その後検討する時間を得られなかつたが、先般やつと都合がつき、久永春男、齊藤嘉彦氏に同



第20図 寺林第1号墳出土仿製鏡拓影図 第21図 寺林第1号墳出土石劍（実測図）  
道を願い、現地を確認し、遺物を吟味していただいた。

筆者らがお会いした軍二郎氏はすでに他界されていたが、当主英司氏から詳しい御説明をいただいた。それによると、古墳は直径およそ20m、高さ3m程度の円墳であったらしい。地籍は大字中志段味字上寺林92-2番地である。古墳を崩したのは昭和12年頃である。墳丘の東側の裾から大きな甕が出土し、この中に2点の遺物が入っていたということである。甕は須恵器であったようであるが、焼れてしまつて現存しない。

出土した鏡（第20図）は、表面径5.1cm、背面径5.3cm、面反り1mm、鉢高1.7cmをはかる仿製重圓文鏡である。素紐をめぐって二重の凹溝をめぐらし、二つめの凹溝には珠文を42個配する。次いで櫛齒文帯から素縁になる。櫛齒文は75本である。縁端

が一部腐蝕しているが完形である。

石鈴（第21図）は外径7.6cm、内径5.5cm、高さ1.7cmをはかる。立ち上がりは内側している。斜面には135本の刻線を放射状につけている。碧玉製である。刻線の間に赤色顔料が残っているので、もとは棺内にあったのではないかと思われる。

この2点の遺物が出土した古墳を寺林第1号墳とし、寺林42番地にある古墳を寺林第2号墳と呼称することにした。寺林第1号古墳の出土遺物から、寺林古墳の1基は中期古墳と考えられ、他の1基もおそらく同じ頃に築かれたものと思われる。

末筆ながら、遺物を快く閲覧させてくださった川本英司氏、同夫人に厚くお礼を申しあげるとともに、故人になられた英司氏の御尊父軍二郎氏の御冥福をお祈りする次第である。

註：地目「塚」の調査結果については、調査終了後市教育委員会に報告した。

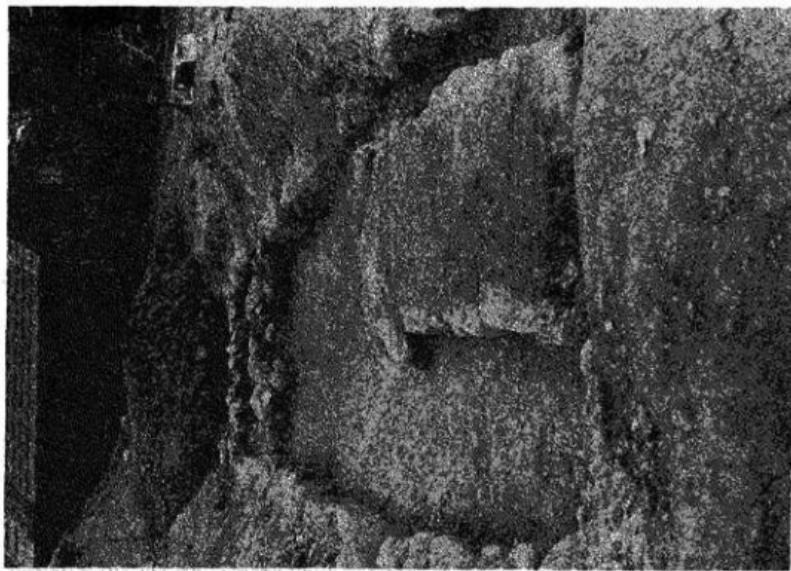
（七原 恵史）

図 版

図版 I

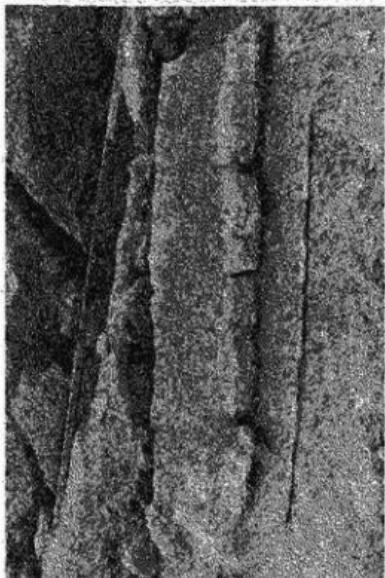


(1) 石室全景(南西から)



(2) 石室全景(北東から)

図版 II



図版 III



(1) 小形高杯形土器出土状態



(2) 小形高杯形土器出土状態

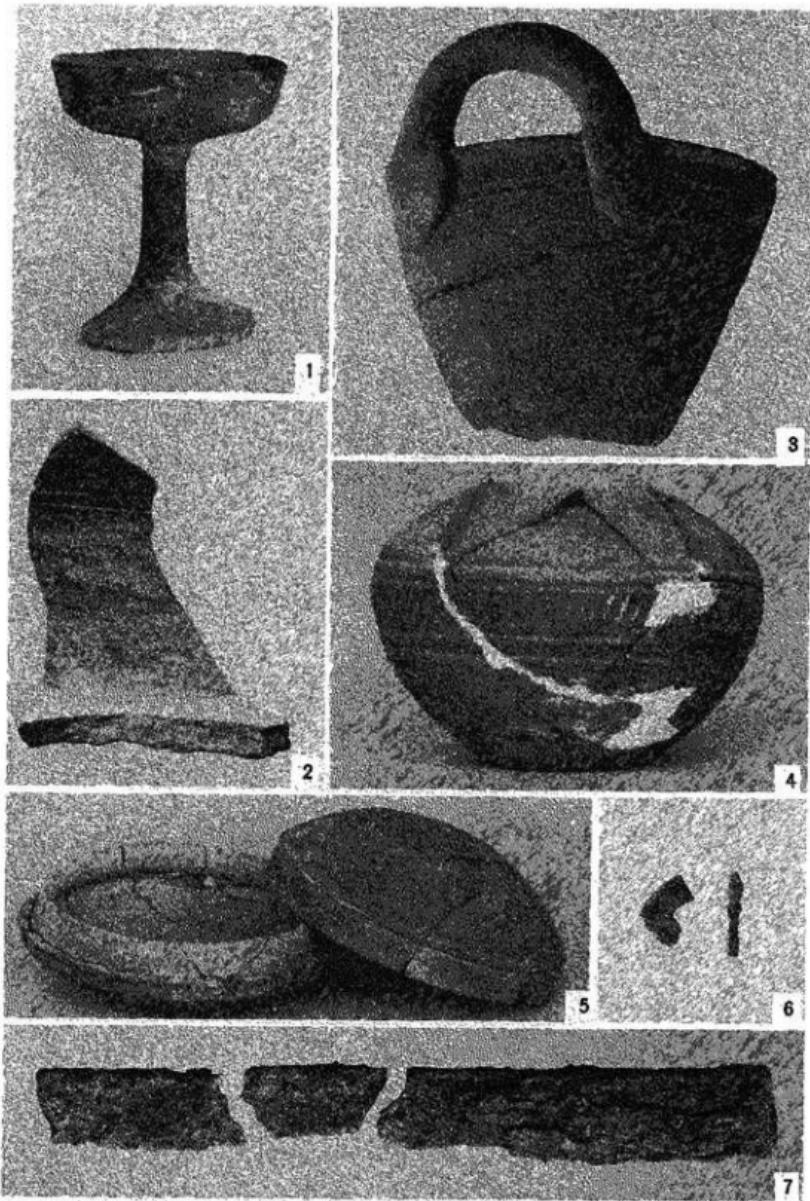


(3) 瓢杯出土状態

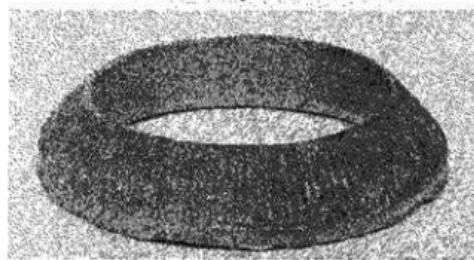
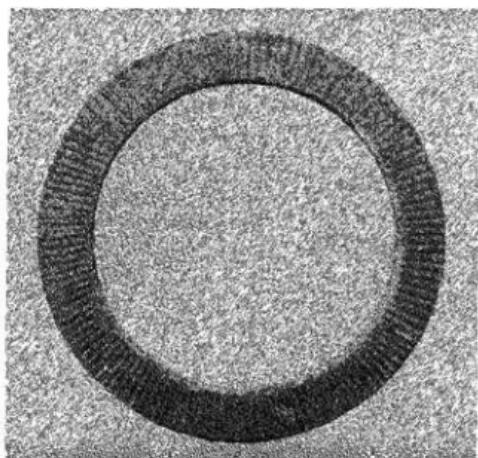


(4) 把手器合形土器出土状態

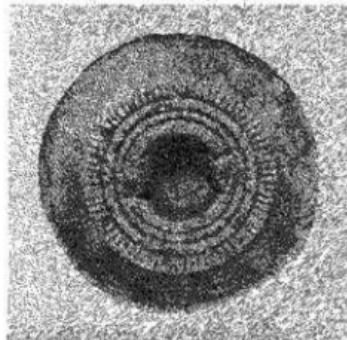
図版 IV



(1)高环 (2)大形壺 (3)把手付器台形土器 (4)長颈壺 (5)蓋環 (6)鉄錐(右) (7)鉄刀(各約 $\frac{1}{2}$ )



(1) 寺林第1号墳出土石钏



(2) 寺林第1号墳出土仿製錠

名古屋市文化財調査報告 既刊目録

I	名古屋市千種区	東山H-101号古墳跡発掘調査報告	1973	品切
II	名古屋市中区	古沢町遺跡発掘調査報告一弥生編一	1974	〃
III	名古屋市千種区	御影町古墳跡群発掘調査報告	1974	〃
IV	名古屋市熱田区	有松町並み調査報告	1975	〃
V	名古屋市熱田区	NK1-34号古墳跡発掘調査報告	1975	在庫
VI	名古屋市熱田区	徳重西部土地区画整理事業予定地内所在 埋蔵文化財発掘調査報告	1976	〃
VII	名古屋市昭和区	光真寺古墳跡発掘調査報告	1979	〃
VIII	名古屋市守山区	小幡古墳発掘調査報告	1980	新刊

小幡古墳発掘調査報告書

1980年3月31日 印刷・発行

福 美 名古屋市教育委員会社会教育部文化課

発 行 名古屋市教育委員会  
名古屋市中区三の丸三丁目1番1号

印 刷 株式会社 一誠社  
名古屋市昭和区下落合2-22

紙料配布 400部

